
僕の爆弾

文月一句

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の爆弾

【Nコード】

N6634V

【作者名】

文月一句

【あらすじ】

かつて「僕」は世界の壊し方を知っていた。

プロローグ

僕の爆弾^{テロル}

この世界は細かくつもった塵みたいなもので、

僕がひとつ息を吹けば、簡単に飛んでいってしまう。

僕というやつはそういう奴で、自分で言うのもなんだけど、危険な奴なのだ。

鉄格子の中とか、堀で囲まれた堅牢な要塞とか、

そういう所に僕は収監されるべきなんだと思うのだけれども、

世間は壊れやすいというのに不自由で、どうやらそうはしてくれないらしい。

僕は今、ファーストフード店で食事をしている。

そういう風に最初から??少なくとも三日前から??決まっていたし、

僕もその事に異存は無い。

このゴミみたいな食事が僕にはとても合っている。

さて、そんな僕がただメシを食べるためにこんな店に来る訳が無かった。

とある女性が会いたい、というのだ。

断るわけにもいかない。

ただ、僕の心配するのは彼女が女性であるかどうか、非常に悩ましいという所だ。

時間を守らないというあたりは非常にそれっぽい。

「お待ちませ。待たせたようだね」

ひょうひょうとした態度で、遅れた彼女はそう言った。

年の頃は十代の後半にようやくさしかかったあたりだろうか。
今では珍しい黒髪を流すように腰まで延ばし、それを一つ、結って
いる。

動くのにじやまになりそうなのは髪だけでなく、

服装だって古めかしく、赤いワンピースタイプのドレスを着ていた。
明らかにこの場に来るような格好ではなく、今からフラメンコでも
踊りだしそうな気配だ。

「待ち過ぎだ。ポテトが溶けそうだぞ」

「悪い悪い。まあ、オレンジジュースおごるからさ、チャラにして
くれよ」

「ジンジャーエールだ」

「よし、じゃあそれだ」

彼女は立ち上がり、カウンターへと注文をしに行く。

行動の一つ一つがわざとらしく、衆目を無駄に集めていた。

情熱的な瞳に褐色の肌は、活動的な彼女の様子を、そのまま切り貼
りしたようだ。

「さて」

どかり、と彼女は自分の注文したもののすべてを、僕のポテトの前に
置いた。

僕はわざと飲み物は注文していなかった。

最初から相手におごらせるつもりだったからだ。

「高いジンジャーエール、飲んでもらうぜ」

「バカ言つな。こんなタダみたいなもん」

「そりゃ、君はタダだろうさ。私は違う。ちゃんと金、払わなきゃ
ならん」

つまらなさそうに、彼女は僕のポテトを一つつまみ上げて、口へ放
り込んだ。

「それにしても子供の小遣いよりまだ少ないだろ」

そういつて、僕はジンジャーエールに口をつけた。

薄い炭酸が喉で弾ける音が、耳の奥で聞こえている。

それと同じくして、甘辛い液体の味が口内に広がった。

「あーっ、話始める前に飲みだしやがった!」

「うるさい。静かにしなさい」

目の前に居る彼女は、それを聞いてにやりと笑う。

「はい」

素直な返事とは裏腹に、彼女の中にはきつと何か、含む物が育っていつているのだろう。

彼女はその表情を崩さず、本題に入る。

僕に注文をしにくる客は、いつもそうだった。

どいつもこいつもふざけた顔をして、そのあと僕に何かしらの野望を話すのだ。

「君にぶっ壊してほしい物があるんだ」

「知ってる。言ってみろ」

にやけた顔は、一転して真面目くさった顔になる。

こいつだって同じだ。

他の客と何にも変わりはない。

「世界」

「はあ?」

僕は、仕事の話の時だけはお客をバカにしないでおこうと決めている。

それは、商売に関わる人間すべてにおいて、常識みたいなもので、誰かに教わる種類のものではない。

「世界をぶっ壊してほしいのさ」

「頭イカれてんのか?」

「出来ないの」「出来るさ」

僕は即答した。

そう、僕は世界だって、ぶっ壊そうと思えばぶっ壊せる。
そういう種類の人間なのだ。
それでも一つ、からかわない手は無い。

「そこにでかいビルがあるだろ？」

「……………うん」

明日にでも世界が終わるのだと信じて疑わない彼女は、
僕の話を見目目に聞いている。

情熱的な瞳は、より一層の熱を帯びて、僕の意識を釘付けにしよう
とした。

それでも僕は、なんとかそれを振り切って、意地悪な一言を相手に
投げかける。

「その一番上から飛び降りてみな。頭からだ。ケツからじゃない
ぜ、頭からな」

「ふっ……………っざけてんのか？ ああ？」
身を乗り出し、彼女は僕の胸ぐらを掴む。

いい瞳だ、いいにおいだ。

「ふざけてんじゃないぜ」

「その態度がふざけてんだよ！」 「試した事はあるのか？」

「はあ？ そんなの死ぬに決まってるだろ！」

「僕は試した事があるぞ」

僕は、頭の傷を彼女に見せた。

合計六十針を塗ったその傷は、僕の帽子の下に隠されている。

「死ねないんだ」

「あ……………あ……………本当、なのか？」

彼女は僕の胸ぐらから手を離し、それからすとんと席に座る。

「ああ。脳みそぶちまけてもな、僕は死ねない」
事実だった。

それから、僕はいろいろと失ったのだ。

最初に最愛の人を。

次に最高の友人を。
そして最後に。

世界の、ぶっ壊し方を。

彼女

すっかり落ち着きを取り戻した彼女を、今度は僕がにやにやと眺める番だった。

「年齢は？」

「……16」

「ほう、16で世界をぶっ壊したいって？ 親父と喧嘩でもしたのか？」

「ママしかない」

「それはすまなかったな」

彼女は別にその発言にして気にしているそぶりもなく、炭酸の抜けたジンジャーエールのような反応しかしなくなった。しかし、それでも謝るのは礼儀というものだ。

「君のママは……知ってるのか？ その、世界をぶっ壊したいと先ほどの一連の騒動で、周りの目が集まっているものと思っていたけれども、

思ったよりは注目されてはいないようだ。

新たな客が華美な格好をした彼女に一瞥をくれるだけで、その後何の興味も無く自分の世界へと没頭している。

この人間は皆そうだった。

「ママは関係ないよ」

「関係なくとも世界をぶっ壊せば、かならずママもぶっ壊すことになる」

彼女は、年齢相応の少女のように何も言えず、ただ黙ってうつむいていた。

先ほどまでの勢いや、情熱を感じさせる雰囲気その一切を失っていた。

「関係……ないよ……」

「関係なくはない。爆破するんだ。粉微塵になるぞ」

「ママは……寝たきりだから。たぶん、何にも考えずに死ぬ」

「寝たきりでも、意識を失ってても、脳みそは生きている。君の夢
を見てるかもしれん」

今回の仕事は厄介だ。

昔の僕なら、確かに世界をぶっ壊す事が出来たかもしれない。
あきらめてもらう方が都合がいいようだ。

「出来ないの？ 飛び降りたとか、ごまかされた気がする」

「君こそごまかすな。世界を爆破するなんて、突飛なことを」

「ウワサになってるよ。昔ほどの力は無いって」

「何を根拠に……っ！」

僕の目の前には、銀色に光る不穏な物体があった。

それは、かつての拳銃と同じ役割を果たす物だ。

彼女の手に握られた金属塊は、火薬の反動で鉛玉を発射するような
ものではない。

そういった構造のものは製造が禁止されているし、

仮に密造したところで、現在では昔ほどの効果をあげないとされて
いる。

なぜなら、僕のように人間が非常に頑丈になつてしまったからだ。

僕の体にも、彼女の体にも、おそらくここに居る全員に、

菌類ほどの微細な存在が、無数に住み着いている。

彼らの仕事は寄生体の保護で、ほとんどの外傷や病気に対して、
半永久的な耐性を与えているのだ。

無論、耐性がつくだけであって僕のような事例は稀だ。

一瞬にして失血したり、窒息したりして死ぬのには対応できない。
そして、もう一つ。

「知ってるだろ？ 君が発明したものだし」

「そいつをどける。すぐにだ」

「強がっちゃって」

僕がその昔、開発した武器が一つだけある。

それは、人体に住まう微細な機械とも言うべき彼らをハッキングするものだ。

ソフトウェア的にハッキングするのではなく、ハードウェア的にハッキングする。

極端な話、ずたずたにして使い物にならなくするものだ。

もちろん、それで即死するわけではない。

ただ、非常に重篤な状態になるのは確かだった。

人間は頑丈になったかわりに、かりそめの頑丈さに頼りすぎるようになった。

彼らが居なければその辺りに飛んでいるウイルスにさえ人間は勝てない。

「私は引かない。世界を壊して」

「……無理だ。僕には出来ない」

僕は、正直に言う事にした。

なぜなら、彼女の瞳に熱が戻っていたからだ。

「やっぱり。でも、全く出来ないわけじゃないんでしょ？」

「どういうことだ？」

「とぼけないで。出来なくても」

すうつと、彼女は息を吸った。

「方法は知ってる。そうじゃない？」

「……ああ」

「教えて」

「教えてどうにかなるもんでもない」

僕は頭をかいた。

その反応が気に食わなかったのか、彼女は僕の眼前に、いびつな形をした金属塊を突き出した。

「それでもいいから。出来るか、出来ないかじゃないの……」

「僕の所に来たのはなぜだ？ どこで僕の居場所を知った？」

「何で？ 君、とつても有名じゃない」

「そりゃ、知ってるだけなら知ってるだろうさ。でも住所は別モン

だ

守秘義務があるからもちろん口外しないが、

僕は今、政府に飼われている身だ。

政府の指定する客と会話し、客の要求通りの破壊を行う。

僕は、そうだった存在なのだ。

「正規のルートで」

「君のママは役人だったのか？」

「私がね」

彼女の瞳は相変わらず本気だ。

確かに、寝たきりのママが娘の話聞いて指示するとは考えづらい。

「いろんな事をした。今の地位につくまでにね。どうせ……」

「世界はなくなる、か？」

「そう」

「……世界が無くなる、って言っても、この宇宙が無くなるわけじゃないぜ」

僕はそう言っつて、ファーストフード店のちゃちなガラス窓をとんとんと指で叩いた。

向こう側に見えるのは、町並みでは無くなっている。

彼女は一瞬驚いて、すぐに平静になった。

「やっぱり、力は本当だったのね……！」

「バカにしてるのか、君は」

僕はまさか、窓をハッキングしただけで驚かれるとは思っても居なかった。

爆弾

いつまでも窓を見続ける彼女を引きはがすために、僕は窓のハッキングをやめた。

この店は半分ほど僕の管理下にある。

無論、許可など取っていない。

毎日こつこつセキュリティを軟化させておいたおかげで、

こういった交渉ごとの時に相手を驚かせるぐらいの事は出来る。

「これが……爆弾の正体？」

「そうだ……実際に何かが弾けるわけじゃない。でも、そう変わらない事が起こるのさ。」

この窓に映った内容だって、ただの映像じゃないぜ。ただの映像っていうなら」

「今の外の景色こそ、映像なの？」

「そうだ。ご明察」

僕の爆弾は、この程度までに威力が落ちてしまった。

昔であれば実際に干渉して、町ごと宇宙空間へ放り込む事も出来ただろう。

無論、これは人類の機械依存が低下している証拠でもあった。

僕の作る爆弾は、この世にあるあらゆる機械にソフトウェア的にもハードウェア的にも干渉する事が出来る。

単純な破壊はもちろん、操作も変質もお手の物だ。

他の人間が同じ事をするには、それこそ全地域のセキュリティを手中におさめ、

なおかつ世界を構成する粒子のハッキングに成功しなければならぬ。

地域のセキュリティと粒子のそれは、まったく別物なのだ。

それもそうだ。

こんな事がどいつもこいつも出来るのであれば、世界は僕が破壊す

るまでもなく無茶苦茶になっているだろう。

「知らなかった……映像だなんて……」

「知ってるほうがおかしいさ。大概の人間はここが火星だって事も知らない」

興奮状態にあつた彼女を取り押さえるのに、僕は一体いくつの仕掛けが必要なのだろうと考える。

なんとか冷静に話をしているけれども、頭の中は彼女がさつき突きつけた武器の事で頭が一杯だ。

「僕が今出来るのはこの程度の事さ。それで、世界をぶっ壊す方法だがね……つまりは、こいつらを全部書き換える事になる」

「……全部？ 粒子の書き換えなんて、君にしか出来ないんじゃないの？」

「出来るさ。作った奴が居るんだ。製造者が干渉出来ないわけがない。君も政府の人間だったら、知っているだろう？」

粒子の製造者は百二十六社を必ず設定しなければならぬ、って」

「でも、そんなの形だけだと思つてた」

「君はいつ宇宙空間に放り込まれるかわからない状態で、生きた心地がするか？ しないだろ」

「私にも出来るの？」

「は？」

彼女が身を乗り出して、僕に問いつめる。

「私にも、粒子の操作出来るの？」

「どうだろうね あ、いや、出来ませう」

彼女が懐に伸ばした手を見て、僕は即座に答えた。

どんな人間であろうと、ある程度の学習をすれば、一社程度の粒子操作は可能だ。

「でもハードルがある。まず、音がする。こいつは昔の僕がやった時もそうだった。僕の事を知ってるなら、僕が操作した所を見た事くらいあるだろう？」

「何度か、映像で」

「なら話は早い。誰にもバレずに操作するというのは無理だ。そうやって、映像に納められたりという事も簡単だ。この星すべてに作用させるってんなら、こいつは準備段階の時点で気付かれるぜ」

「準備段階？」

「映像を見た事があるのは僕が作用させている所だけか？」

「私が見たのは、三十分ぐらいの映像だった」

「じゃあ分からんかな。粒子のハッキングには手順があるのさ。そういう不可避の障害をもうける事で、セキュリティを強固にしている。誰でも魔法は使えない」

彼女が懐に伸ばした手は、一旦膝の上に置かれた。

このまま襲いかかって引き倒してやるうか、とも考えたが、それは僕の流儀に反する。

「手順？」

「そう、手順だ。まず認証手順として、名前を名乗る必要がある」

「……名前」

とたん、彼女の表情が曇った。

僕は依頼の時に相手が名乗らない限り、依頼主の名前を聞く事は無い。

依頼主に会う時は身体的特徴を知らされるだけで、身分や名前は伏せられている。

大概は調べればすぐに分かるのだが、政府の高官だけは別だ。

僕が得意な「準備」を進めれば可能ではあるけども、

僕は人間に対してそれほどの興味を持つ事は無い。

ただ、僕は政府からの仕事をこなして無為に生き続け、僕が背負った罪に対する罰を受け続けるだけだ。

「名前を名乗って、それから？」

「操作する対象の宣言が必要だ……まあ、これは最低限イメージでもいいかな。とにかく、操作対象は必ずいる。僕も複数の対象を同時に操作する時は、複数のイメージをいっぺんに思い浮かべる」

「……それで？」

「動かし方は百二十六社それぞれ違う。それは各社の極秘文章テキストに示されている」

「極秘文章？」

彼女は、僕の話に熱心に聞いていた。

僕は彼女の姿を見て、忘れていたのだ。

公共の場で極秘文章テキストの話をする危険性の事を。

百二十六社の会社による、監視体勢の事を。

窓ガラスが突然爆ぜたのは、決して僕が何らかの操作をしたからではない。

純粹な、物理現象の結果として爆ぜたのだ。

蛇

粉々になったガラス片が、僕たちの席に降り注いだ。
店内は騒然、悲鳴の嵐だ。

ただガラスが衝撃波だとかで割れた訳ではない。
ここに居る多くの人は、そんな些末な事に驚いているわけではなかつた。

飛び出して来たひも状の……いや、蛇と言った方が適当な存在に
対して、

悲鳴をあげたのだ。

この姿を知らない人間は、この界限にはまず居ない。

治安維持のためという名目で放たれたこいつら二対の存在は、
市民にとつて恐怖の的だった。

彼らの姿はそのまま刑罰の姿を取っており、

僕たちの目の前に現れたそれは、絞首刑を公衆の面前で行うための
ものだった。

「くそ、まずい、君、そいつをよこせ！」

「へっ？」

僕は、床に伏せていた彼女を引っ張り上げ、

無理矢理懐に手を入れて金属塊を引っ張りだした。

「なっ、何を！」

「うるさい！」

有無も言わずそいつを作動させる。

うねうねと動き条文を読み上げようとした二匹の蛇を、
僕は容赦なく破壊した。

電子の申し子である彼らは、僕たちに金属塊を向けた時と違って、
崩壊が一瞬にして起こる。

彼らの結合は瞬く間にほころび、ただの砂のようになって人工の風
に運ばれた。

「場所を変えよう」

「ちよ、待つて、返せ！ ヘンタイ！」

「そんな事言ってる場合じゃないぞ。僕がやつらをぶっ壊したという事は、もう上の方に知れ渡ってる」

「上つて、政府？」

「法務関連は他の機関と切り離されてるだろ、この間抜け！ いいから走れ！」

「ま、間抜け……！ もう！」

彼女は何か一言言いたそうだったが、僕が走るのを見て付いて来た。店員が何か叫びだす前に、僕はガラスを復元し、勘定を電送した。

僕がガラスを復元してみた時に悲鳴は上がらない。

業者だつて同じ事をする。

その事を他の人間が出来るというのは本来驚かれるべきなのだけれども、

その事に気付かない人が大半だ。

「返す」

僕は、勢い走つて出た郊外で、金属塊を無造作に彼女に向かって放つた。

「乱暴に扱わないで」

「そいつは僕が作ったものだけ。そんなヤワな作りはしてない」

「……これ、何で出来るの？」

「ただのスチールだ。正確にはS45C。そんなにいいモンじゃない」

「安いのか？」

「高い。とんでもなくな。地球製だ」

彼女は言葉を失った。

きつと、彼女はもつと小さな子供の頃、ここを地球と置いていた事だろう。

火星はいつかの火星より、ずっと住み良い、いい星になっている。
二キロほど走ったというのに息も切らさない彼女は、
地球人らしくよく運動しているに違いない。

郊外部は産業部ほど重力の調整がされておらず、
地球重力は維持されていない。

そのおかげで僕たちは息を切らしていないわけだが、
ここに暮らす人々は、産業部での労働のたびにくたびれているのだ
ろう。

ただ、ほとんどが機械のオペレーター作業で、
彼らの仕事の意義は体調の維持にある。

やはり、地球で生まれた我々は地球の重力が一番体にとって都合が
いいのだ。

重力を発生させる事も出来なかった初期の偉大な開拓者たちは、
そろいも揃って短命だったようで、彼らの遺伝子はごく少数の人た
ちにのみ受け継がれている。

彼らは逆に郊外部にしか住めず、主な仕事は行政だ。

彼女のように産業部に来る事になった人が行政に関わるといのは、
自由な選挙が行われているはずのこの地でも困難な事だった。

だいたいからして、彼らが会議を行うのは郊外部であり、
産業部での仕事に慣れた人々にとっては大変だ。

彼女のような年齢でそういった仕事に関われるのは、
ほとんど奇跡だと言ってもいい。

確かに彼女は行政に関わる権利を有する年齢に達している。

論理的に言えば可能で、実際そうになっている。
なっていないければ僕に会う事さえ出来ないはずだ。

「体、鍛えているのか」

「……何で？」

「走るのが速かった」

「君こそ」

「僕は色タインチキをしてるからな。地面だって動かす事ができるんだぜ」

「名乗ってもないのに？」

「そうだ。僕は名乗りなど必要ない。直接干渉してるからな」

僕はそう言つて、指と指の間に電気をほとばしらせて見せた。

「こんな手品みたいな事も自由自在……だった」

「頭を打つまでは？」

僕は、黙つて頷いた。

「なぜ飛び降りたのか、聞いてもいい？」

「そんな女らしい喋り方も出来るんだな」

そう僕が茶化すと、彼女は真つ赤な顔で言い返した。

「舐められると思つたから……！」

「まあ、僕も年下から君、なんて言われるのもなかなか無い経験だから良かったよ」

「ごまかさないで！」

「君もさんざん母親の時に誤摩化したくせに……」

彼女はむつつりとした顔で黙つた。

僕はその様子を見て、おかしそうに笑い、

意地悪に、そして予定通りに、話を続けるのだ。

依頼者が不安に思い、説明を求めた時に、僕はいつも答えて来た。

過去の話を出し惜しみせず、だからといって哀れみを請うわけでもなく、

ただ、単純に聞かれたから話すのだ。

「五年前の話だ。ついて来れるか？ まあ、君なら大丈夫だろ。利巧そうだからな」

五年前の、粉々になった記憶を、僕は再びつなぎ合わせる。

今まで何度か、少なくともはない数やってきた事だ。

白虎

破片のごとき記憶の一つ一つに、
僕の苦痛が詰まっている。

それでも、僕は絶対に話す事をやめない。

「五年。地球での五年と一緒だ。火星の五年じゃないぜ」
彼女は何にも言わなかった。

それでも、彼女の瞳から情熱の色は失せてはいない。

しっかりと僕を見据えて、話が始まるのを待っていた。

今まで興味本位で聞いて来た人たちは、こんな目をしては居なかつた。

「僕があノビルに昇るまでの話は……君も知ってるか？」

「知ってる。私は十一歳だった。ママも普通だったし……」

「そうかい……じゃあ、僕がどんな罪を犯したか、知ってるね？」

「爆破でしょう？ それも、会議場を爆破した」

「まあ、そんな所だ。君が見たのは、ニュースか？」

「……うん。それ意外無かったし」

「そうか……じゃあ、僕はただのイカれた野郎だと思っただろう」
彼女は首を横に振る。

ただ、何も言いはしなかった。

「君は変わってるな。まあいい。その方が好都合だ」

僕の今までの経験では、みんな口には出さないものの、狂人だとい
う印象を持っているのは確かだった。

「僕は当時、アイツに……ホワイトタイガー白 虎にいいように操られてた。

奴は、僕より先に僕の能力に気付いたんだ。

確かに、僕はある程度自由に出来ると思っただけ。

昔っからいたずらの証拠隠滅のために割れたガラスを治したり、
転んで出来た傷を消したりしてた。友達も含めてね」

ホワイトタイガー白 虎という言葉に、彼女は強い反応を示した。

言葉こそ挟まなかったものの、その目は、何かを言っているのと同じに強烈に僕に働きかけた。

ホワイトタイガー
白 虎は現在指名手配中の身で、僕でさえ居場所を知らない。

あのビルに昇らなかつた僕らの一人メンバーで、そのまま行方不明になっている実質的な指導者だ。

「そいつがいけなかつた。僕は、ホワイトタイガー白 虎に頼まれたんだ。

君と同じように」

「世界を、ぶっ壊せて？」

「そう、そうだ。同じ事を言った。

でも、君のような目をしてなかつたぜ。

奴はただ冷静に、僕に微笑みかけていったんだ。

奴はいつもそうだった。何もかもが計算ずくで、

僕がすべてを失う時も……奴は……」

僕は、自分でも知らないうちに拳を握りしめている事を、食い込む爪の痛みで知った。

言葉が詰まってしまう。

「どうしてたの？」

「下から見てたんだ。笑ってた。僕は目がいいから、すぐに分かった」

目がいいなんてものではない。

僕はあらゆるものを知覚する事が出来た。

この火星を支配するすべての物理法則は、当時僕の手中にすべて入っていたのだ。

「飛び降りたビルの名前を、君も知っているだろ？」

アンチウイルス
「執行機関ビル？」

「そうだ。僕は警察機能を麻痺させるぐらい、徹底的に叩きのめした。僕が見たあの蛇も、僕が叩きのめした結果出来たものだ。

人間が居なくなりや、機械に頼るしかないからな」

「なぜそんな事を？」

「白 虎ホワイトタイガーが言ったんだ。」

奴ら……警察が、僕の婚約者を拷問にかけてると。実際に、かけられていたんだけどね」

彼女は何も言わない。

婚約者の顛末について、野暮な人間どもは喜んで聞いて来たというのに。

「殺されてた。さんざん苦痛に見舞われた後で……僕も、死人は生き返らせなかった」

殺されたのは、婚約者だけではなかった。

おなかに宿る、僕の子供も同じく殺されたのだ。

「僕は、人殺しには消極的だった。」

会議場を爆破した時も、建物だけを吹っ飛ばしたんだ。

人間には確実に、ひとかけらの破片も当てちゃいない。

婚約者が居たぐらいだ。人間は好きだった」

「白 虎ホワイトタイガーが……？ 警察を潰すために？」

それだけのために？」

彼女は、震えるような口調で言う。

「君は利口だな。そう、僕の婚約者は白 虎ホワイトタイガーに売られた。」

奴が警察に突き出したんだ。それを知ったのは、僕が頂上から奴を見下ろした時だ」

白 虎ホワイトタイガーの狂った微笑が、僕の脳みそにこびりついている。

奴は自分の信じる革命のためならば、どんな犠牲でも厭わないのだ。

「白 虎ホワイトタイガーは破壊魔だったの？」

「いいや、破壊魔は僕さ。奴じゃない。奴は柱一本だって折っちゃいないぜ。」

奴がやったのは人間を集める事、管理する事、けしかける事。

全部、奴の思惑通りにね。

人を殺したくて殺してるんじゃない。

奴は目的があつて、一番簡単で早い方法を選択しているだけだ。

その結果が、爆破や殺人につながる」

「……私は、君が死刑になっただって聞いてた」

「実際、死刑みたいなもんだ。」

僕の部屋に来てみるか？

本当、何にも無いんだぜ。

死ぬ事なんて簡単な事なんだ。

さつき、ファーストフード店で僕は抵抗しただろ？

あれは、僕を殺そうとすると君が……殺されるから抵抗したんだ」

先ほど返した金属塊を、彼女はぎゅっと握った。

僕の作った武器は、実のところ僕に対しては効果がさほどない。

ナノマシン
小さな仲間をぶっ壊したところで、僕の体に再び注入されるだけだからだ。

一般人がそういった種類の手術を受けるのは、経済的に負担が大きい。

だから、あの金属塊は致死性の毒と同じ効果を得られるのだ。

「さあ、そろそろ話してくれるか。僕は話したぜ」

「……何を？」

「君の名前だ」

「私だって君の名前を聞いてない」

コリス
「七月」「嘘でしょ」「嘘でも名前だ。さあ、言えよ」

彼女は唾を飲み込んだ。

思い切りのいい彼女が、覚悟を言うのだ。

僕は、三年ぶりぐらいにする真面目な顔で、彼女を見つめた。

ホワイトリシイ
「白百合」。さつき、あなたが何度も名前を口にした人の、娘よ」

安全地帯へ

「君が白虎ホワイトタイガーの娘だって？」

僕は、さすがに驚きを隠せないでいた。

なんせ、白虎ホワイトタイガー自身の申告を信じるのであれば、

彼は僕と同じ年だ。

落下の時のショックで記憶が曖昧になっている部分もあるけれども、僕の年齢は25からそう上回る事は無い。

リリーの年齢も、彼女の発言を信じるなら十六であり、僕の目からもそう見える。嘘はついていないだろう。

「そいつは確かなのか？」

リリーはただ静かに頷いた。

根拠も証拠も何も無い。

「しかし、君は全く似てないぞ」

「私のDNAを調べたら分かる事よ。今はそんな事してる余裕なんて無いでしょうけど……」

そうだ、僕たちは逃亡の最中で、今は小休止中なのだ。

「蛇」を破壊した以上、それを管理している人間が黙っちゃいない。

「蛇」の出動は執行機関アンチウイルス全域に知らされるわけではなく、ただ対となる「飼い主」に知らされるだけだ。

無論、飼い主は上層部に報告する義務があるが、破壊されたなど報告できるはずもない。

そうなつては、飼い主自ら手を下さなければならぬ。

「蛇」は彼らにとって道具にしか過ぎず、

条文を読み上げるといふ規約さえ守れば、銃殺したってかまわないのだ。

「僕の住まいへ行こう。あそこなら安全だ」

「なぜ？」

「僕の家は不可侵なんだ。誰であろうと侵入するのに僕か政府の許

可がいる」

「でも、蛇みたいな自動機械オートマタみたいなのは勝手に入ってくるでしょ？」

「僕を誰だと思ってるんだ」

僕は、リリイが未だ握っている金属塊を指差して言った。

「そいつで処理した時と同じ末路が待ってるだけだ。窓さえ破れない。」

さあ、さっさと行こう。ここからそう遠く無い」

「どこにあるの？」

「ちよつと戻る必要がある。まあ、今度の相手は人間だ……」

それに、今頃僕の名前を見てビビってるどころだろ。

普通の奴ならな」

「そりゃあ、びっくりするでしょうね」

僕がリリイに名乗った七月ユリウスという名前は、

この惑星の総長に代々付けられる名前だ。

僕たちの住む地域というのは、火星の全地表面積のほんの0・03

%に過ぎない。

火星の地球化など夢のまた夢で、人間はドーム状の基地の中で、
だましまし生きているわけだ。

無論、その情報を開示しているドームもあるし、

僕たちの所のように、徹底した秘密主義の所もある。

少なくとも、すぐさま絞殺するような過激な警察組織のあるような
ドームは、

この火星の中でもたった一つだけだろう。

一般の人たちは、少し調べれば分かる「他のドーム」の事を知らない。
い。

が、無論政府や司法機関は知らなければ仕事が出来ない。

飼育主程度の権限がある人間であれば、七月ユリウスという名前程度は知っているだろう。

「あなたは、その……つながり、あるの、本物の七月と？」
ユリウス

「あなた、ね。君とは呼ばんのか」

わざとらしくその部分を強調したが、リリイは咳払いを一つするだけで話を続けた。

つまらない反応だ。

「ただの酔狂じゃ無理でしょう？ だって、登録とか出来ないでしようし……」

「僕の両親が政府のコンピュータをハッキングして上書きした。

元の名前は何かはわからんが、たぶん当たり障りの無い名前なんだろう」

この火星にたった一人だけ許された七月という名前は、
ホワイトタイガー

白虎という名前と同じく二つと無い物だ。

白虎という名前の男が指名手配されれば、

ごくシステムチックに同名の人間は改名を余儀なくされる。

元々その名前を名乗っていた人間も、喜んでそれに答える。

変えなければ、警察の職務怠慢が約束されているからだ。

その名前はもちろん、捕まった後にも新たに付けられることは無い。

僕の両親のように無茶をしない限りは。

「さあ、そろそろ到着だ」

僕たちは黙々と来た道に戻った。

誰かに見とがめられるということは無く、順調に帰途につけたのは、

やはり僕の名前を何度か見直しているからだろう。

あるいは、もう追うなどでも命令が下ったのかもしれない。

行政だって司法と同じ力を持っているのだ。

何らかの働きかけをすれば、被害を出していない犯人の逮捕ぐらい

あきらめるだろう。

僕は極秘文章テキストの存在をリリイに伝えたものの、

その入手方法や内容についてはまったく話していない。

話していたのが聞かれたならば、次は蛇ではなく全自動で対象を殺害してくれる、

「犬」が来ていたところだろう。

条文の読み上げも何も無く、ただ殺害するだけの自動機械。オートマタ

犬というのは総称であって、どんな形をしているのかは秘匿されている。

「おい、リリイ」

「リ、リリイって……いつからそんな」

暢気に顔を赤くするリリイの肩を、僕は掴んだ。

「それ以上進むな。」犬”だ”

半地下にある僕の家の扉の前に、2メートルの巨体が佇んでいる。

静かに前を見てじつと動かないそいつは、それほど目立つ図体をしているというのに、

誰にも注目されずにそこに居るのだ。

僕の家の前で待機していた巨大だが存在感の無い物体は、確かに「犬」と呼ばれているものだった。

たとえばそこに自動販売機があつたとして、

いつもその道を通る人にとっては風景の一部でしかない。

そういつたとけ込み方を、「犬」と呼ばれる存在はするのだ。

そのでかい体からは想像もつかないぐらいに俊敏に、

しかし確実に仕事をこなし、主人に従順な事から、

奴らは「犬」と呼ばれている。

正体は遺伝子治療を受けた人間の成れの果てだ。

治療とは名ばかりの、昔戦争に投入された兵士たちが受けたような、強靱な体と恐怖心の無い精神を併せ持った存在に……改造されている。

基地間の戦争が無くなった今は、もっぱら貧民層が金持ちの道楽のために集められているか、

家族の無事やわずかな財産と引き換えになる事が多い。

僕が爆弾として自分の力を引き出そうとした要因の一つに、彼らの存在があつた。

非人道的という言葉さえもかわいく感じるような彼らの扱いは、人間が手を出していい領域を遥かに超えている。

かつて兵士たちに施したものよりももっと強力な「治療」が施されており、

彼らの理性はほぼ吹き飛んでいる。

ただじつと前を見つめている姿も、実は町では見慣れた風景だった。それが彼らが風景にとけ込む事が出来る理由の一つである事は確かだった。

彼らは金持ちの家の鍵代わりに、家の前に待機させられるからだ。武器の所持が全面的に禁止されているこの基地で、

彼らに対抗出来る人間などまずいない。

「あなたの家にも居るの？」

僕に止められたリイが、ひそひそ声で言った。

「居る訳ないだろ。俺の家に入ったとたん、あいつらだってショー
トするさ。」

だが、家の前はまずい。当たり前だが、何にも施していないからな…
…」

ここから犬までの距離はおおよそ200メートルほどで、彼らはお
そらく僕たちの事を視認している。

しかし、こちらに向かってくる気配はなく、ただ見つめているだけ
だった。

放心状態のようにも見えるが、僕が右に行くのと右に、

左に行くのと左に眼球が動くのを、視界拡大をする事によってなんと
か拾えた。

今日はどうやら僕のほうが本調子ではないようで、窓の偏光などと
いう無駄な力を使ったせいもあって、

その程度の力がせいぜいのようなのだ。

普段なら拡大鏡もなしで三キロほど先まで同じ視界が得られる。

それも視力が事実上無限だと言えた過去に比べれば、屁みたいなも
のだ。

「僕一人なら入れるかもしれん。君は無理かもしれないな」

「なぜ？」

「おそらく、僕を攻撃するようには出来てないんだろ。攻撃するつ
もりならもうこっちまで来てる」

この状態の僕では、彼らを圧倒する事など不可能だ。

逃走する事は可能だが、攻撃など一つも通用しないだろう。

今の僕が持てる最強の攻撃は、彼女の持つ金属塊による攻撃だ。

僕はその携帯を許可されていないし、わざわざ持つつもりも無い。

その一番大きな理由が、彼らのような大型で大量のナノマシンを保

有する存在にとつて、
携帯式の”アレ”は出力が小さすぎるといふ事だ。
普通の人間などは僕にとつて取るに足りないもので、
わざわざ金属塊など使つて人を脅す必要も無い。
ただ少しの電流を流して筋肉を緊張させたり弛緩させたりしてやれば、

僕に手を出す気さえ失せるだろう。

「どうするの？」

「うーん、君の家はたぶんもっと危険だろうね。君のママの居る病院も怪しい」

「ママまで!？」

リリイは顔を青くして言った。

彼女の弱点は間違いなく彼女のママだ。心のよりどころという奴だろう。

おそらくは、彼女が世界をぶつ壊したいと願う事の根っこの部分にもしがみついているに違いない。

「まあ、奴らが君のママに手を出せるはずもないさ。理由が無いからな。

ただ、待ち伏せするには格好の場所という訳さ。特に君みたいな親孝行ものにはね」

親指の爪を噛むリリイからは、すっかり情熱の色が落ちており、焦りといらだちが見て取れるようだった。

「だから……ぶつ壊さなきゃならないの」

「なんだつて？」

今の声は僕ではない。

しかし、僕以外に彼女の声が聞こえるとは思えなかった。

ささやき声が普通の通行人に聞こえるはずもない。

そう、普通の通行人には。

「貴様、雀か！」^{スハロー}

僕は、周りの目を気にせず大声で言った。

「いきなり大声を出すなよ。意地悪なやつだな」

耳から伸びたコードを、僕たちの後ろに立つ男は引っ込めた。

男は黒い制服を着ている。

司法機関の制服だ。

「懐かしいじゃないか、七月。^{ユリウス} 君は相変わらず過激な女の子とつき

あつてるようだね」

「何が目的だ……？」

僕は雀^{スハロー}に向き直った。

どうもこの男を背後に置くのは気味が悪い。

「質問される前に答えよう。犬を置いたのは僕だ。彼女を拘束する

ためにね」

にやりと雀^{スハロー}は笑う。僕より背が高い、威圧感のあるその姿は、雀と

いう言葉が完全に場違いだった。

「君のお客さんに逮捕状が出てる」

「はあ？ 何の冗談だよ？」

普通、極秘文章^{テキスト}がらみの案件は逮捕状など回りくどいものは出ない。

完全に担当者個人の受け持つ案件であり、他人に強力を仰ぐなんて

ことは逆立ちしても出来ないからだ。

もしそうすれば、極秘文章^{テキスト}に関わった人間として担当者共々追われ

る身となってしまう。

それに、話そうとしたのは僕だ。

彼女も聞きだそうとしたという経緯があるとは言え、まだ聞いては

いないのだから、

あの場を凌げば彼女に罪は無いはずだった。

「冗談ではないよ。白百合。^{ホワイトリメイン} 反逆の罪で逮捕する。手荒な真似はし

たくない。黙ってついて来たまえ」

緊迫した顔もせず、にやけた顔のまま雀^{スハロー}はそう言った。

捕獲

反逆の罪。

それは、以前僕が捕縛される事になった名目の罪状だ。

その時と違うのは、雀スバローがすっかり警官が板についていて、

もはや僕の味方では無くなったという事だった。

雀スバローはかつて、警察への密偵をしていた。

彼らの作戦内容を把握し、僕たちに伝える役だ。

当然、そのためには警察官にならないといけなかったが、

幸い警察はこの基地においていつも不足している。

この基地では他の基地以上に警察の存在感が薄く、

「治安が維持されている」という事さえ考える機会が無い。

警察からの抑圧など当たり前すぎて、

市民はいつもそこにある壁程度にしか認知していない。

誰が壁役などやりたいだろうか。

そんな中来たのが、雀スバローみたいな頭のいいやつなのだ。

こいつの頭の良さは正直な所など一つもないひん曲がったもので、

きつと僕たちに蛇を送ったのは別の担当者であったのに、仕事を横

取りしたのだろう。

あるいは、担当者は蛇を放ったのはいいものの、途方に暮れていた

のかもしれない。

なぜなら、ここ最近で蛇が破壊されたという事件は発生していない

からだ。

かつて破壊したのは僕ぐらいなもので、どれほどの大男でも、奴ら

の拘束からは逃げられない。

所詮人間の力など、機械に比べれば他愛のないものだから。

雀スバローは、そんな蛇が破壊された瞬間に僕の仕業だと察知したのだろう。

かつての仲間は、僕の事をどう思っているのか。

考えると、ぞっとした。

少なくとも雀スハローはもう市民に戻ることは出来ず、
ずっと司法機関で仕事をしてきたのだろう。

僕たちは誰一人例外無く、そういった市民を監視する存在の事を敵視してきた。

この五年、どれほどの苦痛が雀スハローにあつたのだろう。

少なくとも、彼はこんな笑い方はしない人間だった。

「どうしたんだ、七月ユリウス。君らしくもない」

「どういう意味だ？」

「前の君なら俺でも関係なくぶつ飛ばして、さっさと逃げてる所だぜ」

「お前も知ってるだろう。僕はそんな力を今持ち合わせていない」

「それにしただって気絶させるぐらい簡単なはずだ。まあいい、俺としてはその方が仕事がしやすいんだがな」

そう言つて、雀スハローは手招きをした。

すると、見た目より遥かに俊敏な動きでこちらに「犬」が接近してきた。

肌は浅黒く、筋肉の固まりのような姿をしている。

髪は無く、頭には独特の飾りが付けられていた。

それは、彼らの精神的な働きを抑制するものだ。

たとえ外したところで知能が元に戻ることは無い。

むしろ、思考能力という点では外したほうが劣るかもしれない。

飾りは彼らにとって第二の脳だった。

その禍々しい電気刺激のための突起を有する銀色のサークレットは、彼らの筋肉が行う運動の精度を調整し、本能的な動揺や恐怖といった要素を押さえ込む力がある。

いつか地球の無法者達が時代物の拳銃を持つてきた時、

「犬」は無傷で彼らを取り押さえたことがある。

もし恐怖心などがあつてはなかなか出来ない行為だ。

「お嬢さんをお連れしろ、牙フテング。傷はつけるなよ」

「ちよつと待て、雀スハロー。反逆の罪だと？ 一体どんな」

「反逆は反逆だよ。行政機関に対する反逆だ。お嬢さんは議会を台無しにしたんだ」

「議会を台無しに？ 何をやったんだ、リリイ」

「……知らない」

リリイはうつむき、僕を見なかった。

一体何をすれば、政府の人間である彼女が、反逆の罪で拘束されるのだろうか。

「そう、言わなくて結構。そして君もだ七月^{ユリウス}。これ以上関わるんじゃない」

それ以上の言葉も無く、リリイは抱えられる事も無く、ただ牙と呼ばれた「犬」の後をついて歩いていった。

その様子を見送って、雀^{スパーロー}が僕の方に振り返る。

「七月^{ユリウス}、伝言だ。君の上司から。いつもの場所で待っている、と。それだけだ」

本当にそれだけを伝えると、雀^{スパーロー}は恨み言の一つも言わず、リリイの後ろから彼女を監視しつつ歩いていった。

手には僕が開発した金属塊が握られている。

僕の知らない間に、色々な場所で見えるようになったものだ。

携帯性に優れ、動作も確実ときたら地球製の銃器より遙かに役に立つという事だろう。

火星の人間を制圧するのには充分すぎるものだ。

今の様子の彼女を見れば、制圧する必要性も感じられない。

意気消沈という言葉がぴったりで、僕に初めて会ったときのような情熱は全く感じられなくなった。

僕はリリイの事が激しく気になりながらも、

一時の客だとして忘れる事にした。

僕に依頼をしてくる人間というのは、大抵が変なやつで、

ロクな仕事を受けてはいない。

中には僕を科学者かなにかと勘違いしている奴も居た。

だが、僕に世界をぶっ壊して欲しい、なんて言って来たのは、
リリイと彼女の父親だけだった。
まるで塵チリのように積もったこの世界を、
ただ息を吹きかけるように消し去ってしまう。
そんな事が出来た僕を、まだ出来ると思って……彼女は訪ねて来た。
ただ、それだけの事なのだ。

密談

いつもの場所というのは、僕が仕事を引き受ける時とは天と地ほどの差もあるレストランの事だ。

僕はどちらかといういつものファーストフード店の方が居心地がいい。

いろいろな仕掛けがあって、逃げ出すのも容易だからだ。

しかしここはさすがにそういうわけにはいかない。

基地内屈指の高層ビルの中にあるここは、

まるで僕がどこかに飛んで行ってしまわないように作られたように見えた。

僕が例の金属塊を開発してから、それに対抗するように防具も出来た。

拳銃に対する防弾チョッキのようなものとは違う仕組みだ。

あれは単純に弾丸の貫通や衝撃を抑制するものだけども、

僕の金属塊にはもちろん衝撃波など発生しない。

具体的にどういう仕組みなのか、僕には完全に理解は出来ないが、防磁フィルムと絶縁体を利用して、電気的操作を無効化するものらしい。

ために壁を少しえぐり取ろうとしたけれども、

ただ少し焦げ目がつくだけで、えぐり取れはしなかった。

きつと、昔ほどの出力が出たらこういうものも関係ないのだろう。

いつもの電気を進らせる手品も出来なかった。

それもそうだ。

もし作用できるなら、あの武器を無効化する空間など作れるわけもない。

ここのガードマンはそんな理由で拳銃で武装している。

いくら僕らの体の中にある小さな協力者が死なせない体にしてしまつたにしても、拳銃弾をくれば大抵の人間は悶絶する。

レストランだというのに、ここは物々しい空間だった。
一般市民などほとんど入れず、一部の富裕層のみに対する店だ。
きらびやかな内装も存在せず、部屋の中は薄暗い。
すべての席は半個室のようになっていて、商談や密談に利用されるらしい。

半個室とはいえ、そのための設備も万端である。

ヘタをすると相手の顔も見えづらいほどの、
店内でも一番暗い席で僕は上司と対面した。

いつも仕事を僕によこす時は、ほとんど携帯端末に連絡が入るぐらいで、

こうやって対面する事はほとんどない。

「ひさしぶりだな、七月」^{コリス}

よく通る、密談には不向きな声が僕の耳に入った。

「三ヶ月ぶりだ……元気にしていたか？」

「元気にさせられている。君らの入れたマシンのおかげでな」

「ふふ、相変わらずだ。元気そうでなにより」

僕の上司は、女性だった。

年の頃はおそらく二十五か、そのあたり。

プロフィールはよく分からない。調べるつもりも無い。

僕の目の前で、紫色の口紅を引いた唇と、白い首筋だけが動いているように見えた。

薄暗いながらも間接照明があつて、それがそういう中途半端な像を結んだ。

「久しぶりに化粧をした。君に会う事になってな……」

「そうか。良かったな」

「どうだ、綺麗かな？」

「分かん。暗すぎる」

「色気の無さも相変わらずだ。まあいい、私としても部下と恋愛などするつもりは無いさ」

そう言つて、彼女は紙束を出した。
紙など高級品だ。

それを束で持つとは、酔狂としか言いようが無い。
「今回の仕事はちよつと重要なのでね。紙に直接書かせてもらった」
それならデータを途中で盗まれる心配は無い。

紙を盗まれるリスクは依然存在するが、データを盗まれるよりは容易では無い。

「ここでは見えない」

「明かりを付けよう」

そう言つと、机の上に並べられた紙束がようやく見えるほどの光が、僕の右手側から発生した。

うすぼんやりとした光は、相変わらず相手の表情さえうかがわせてくれないが、

手元の資料は見る事が出来る。

「タイトルで分かるようにした」

「ホワイトタイガー白虎掃討作戦？」

「あまり声には出さなよ」

僕は資料の続きを見た。

掃討作戦。

普通、司法や行政機関が使うような文字では無い。

軍部が用いるような、物々しい言葉だ。

「捕捉したのか？」

「ああ」

「どこにいる！」

僕は思わず、身を乗り出して聞いた。

危うく唇と唇がふれあいそうになる。

「キスを求めるにしてはやかましいな。もっと囁くように言ってくれないか」

「ふざけるな、どこで見つけたんだ！」

僕は店内の静けさも気にせず、上司である北風ノースウインドに怒鳴りつけた。

「落ち着いて資料を見たまえ」

「……すまん」

僕が司法機関の手で死刑にならず、生かされているのはこういう事のためだ。

僕は力の大部分を失ったが、

未だにどんな人間よりもうまく出来る事が、一つだけある。

それは、ホワイトタイガー白虎の抹殺だ。

彼は特異体質で、金属塊のような簡易的な攻撃はまず受け付けない。そういった人間は百人に一人ぐらいは居て、その事自体はそう珍しくは無い。

「僕の予想では、地球に逃げたと思っていたが……」

僕は資料に目を通し、そう言った。

資料に書かれていた予想される白虎ホワイトタイガーの現在位置とは、

この基地の三つとなりにある、「南八号基地」だった。

しかし、掃討とはどういう事だろう。

奴はまた、徒党を組んでいるのだろうか。

「ホワイトリリイ白百合に会ったそうだね」

「……ああ」

僕の上司から来る仕事はすべてではなく、他の政府高官からの指示も入ってくる。

そういった類いの指示は、本来ならば北風ノースウインドは触れられないはずだ。

おそらく、雀スバローからの情報だろう。

「彼女は、彼の子供の一人だ」

「らしいな」

単刀直入に言うよ。と。

珍しく、囁くように北風ノースウインドは言った。

「彼の、百五十三人居る子供たちを全員抹殺してほしい。白百合ホワイトリリイも、だ」

封印

僕には理解できない理屈で、この世界は動いている。

昔の僕は、確かに万能の力を持っていた。

この火星にある、すべての物質に作用する事が出来る能力だ。

そういった力がありながらも、僕はなぜそういう作用が出来るのか、ほとんど疑問に思った事が無かった。

五歳の子供が、なぜ自分が歩けるのか疑問には思わないように、

僕は能力をまるで自分の手足のように動かしていたのだ。

それを、悪魔のような考えを持った人間が覆してしまった。

僕の能力は、とうてい手足なんてかわいいものではなくて、

かつて地球を一度壊滅させかけた核兵器のように、すごく危険なものだった。

僕は自分の能力の限界について考えた事は無かった。

せいぜい友達の怪我を治したり、割れたガラスを修復するだけ。

それさえ出来れば特に問題は無かった。

遊びにこの力を使うのは卑怯だと思って、ずっと使う事は無かった。きつとそういう勝負事に使っていたら、もっと早く、自分でも気付いたのかもしれない。

僕は相手に触れる事無く窒息死させる事が出来る。

僕は銃弾で撃たれてもびくともしない。

何度の炎で焼かれても、何度の低温にさらされても、

それがこの火星の上で起きている物理現象であるかぎり、

僕に傷を付けることは無かった。

僕が、傷をつけることを許可しない限りは。

一度だけ、その許可を出した事がある。

全てを失った僕が、身を投げた時だ。

結果として、僕の本能は僕を守った。

途方も無い力を失った代わりに。

「百五十三人？」

「そうだ。百五十三人も娘や息子が居る。お盛んな事だな……」
ノースウインド
北風押し殺したような笑いを、言葉とともに吐き出した。

「嘘をつけ、どうやってそんなに」

「嘘じゃないさ。クローン技術だ。簡単な話だろ？」

「簡単なものか！ 僕だって知ってるぞ。」

クローンを作るのだって大掛かりな施設が必要だろ？」

誰がそんな事を許可するんだ？」

「君が昔の白虎ホワイトタイガーを知らないだけさ。」

彼は太陽系でも有名な天才児だったんだ。百五十人でも少ないくらいさ」

「そんなバカな、だったらなぜ白虎ホワイトタイガーは地下運動なんて出来たんだ？ そんな奴がたとえ一つの基地でも反逆しようなんて行動を起こしたら、それこそ火星中で大騒ぎだろ？」

「実際大騒ぎだったんだよ。本当に君は世間の事を知らない」

僕は白虎ホワイトタイガーと一緒に各地でテロをしていた時、

ニュースは漏らさず見ていた。

無論些末な事は全く目を通していなかったが、

僕らの行動が書かれたものは、全部見ていたはずだ。

「まあ、無理も無い。ここの基地では報道規制が敷かれていたからな。」

君らの行く先々で、死者が出なかったのは君の力の制御がうまくいったから、

なんて思っていないだろうね？」

「政府が手を打っていたのか？」

「そうだ。ただ……白虎ホワイトタイガーは、次はどこを標的にするか、

毎回司法機関に予告していた。予告を違えることは無かったな」

「予告を？」

そんな事でさえ、僕には初耳だった。

予告なんて出せば、メンバーに危険が及ぶのは百も承知のはずだ。感情的な意見を出す以前に、奴のリーダー振りからすると考えられない事だった。

どんなに最低な人間だったとしても、ホワイトタイガー白虎の能力だけは間違いなく本物だ。

実質、能力を操るのは僕でも、漠然としすぎたその力の向け先を決めたのは全部ホワイトタイガー白虎で、

僕は当時、それぞれの行動に納得していた。すべてが合理的で、知的的で、知性の光を感じさせたのだ。

だが、結局は暴力だ。暴力以上でも以下でもなく、権力に対する暴力行為だった。

「奴は、君を世間に紹介したかったのさ。万能の力を持つ、神をね」

「神だつて？ バカバカしい。神が自分の力について全然分かってないなんて、そんな事あるのか？」

「分かってたら神さ。間違いなく、君は神と等しい力を持っていた。この世にあるどれだけ強力な仕組みも、君にかかれば一発で分解してしまう。」

たとえば、ノースウインド世界とか、ね」
そう言つて、北風は再び僕に紙を見せた。

「それで、やるのか？」
「……僕の知ってるホワイトタイガー白虎はそこに居るのか？」

「さあ、それは分からん……が、この百五十やそこらの人間は、全員常人より遥かに高い能力を持っていて、ある程度は”親”に感化されているのは事実だ。」

ホワイトリライ白百合はどうだったかね？

何か、父親を讃えるような発言はしていなかったか？」

「いや……むしろ、良くは感じてなかったみたいだぞ」

「そうか。まあ、中にはそういった例外もあるだろう」

「そういった例外は、殺さないのか？」

「殺せ」

ノースウインド 北風は、間髪入れずにそう言った。

「だが、簡単な仕事じゃない。僕ははっきり言って、例の能力以外は普通の人間とそう変わらない。

ちよつと頭のいい人間と知恵比べをすれば、負けるだろう。

一般人だって武装した十数人に囲まれちゃ、僕はどうしようもないぜ」

「それは大丈夫だ。君の能力に期待している」

「だから、僕の能力は死んだんだよ。もう無いんだ」

「こいつを使え」

ノースウインド 北風は、錠剤を僕に突き出した。

「ナノマシンだ。君の脳を修復する」

「はあ？」

「君はいわば、封印されてたんだよ。七月。ユリウス

君が無意識にせよ力を使って、たかだかあの距離から落ちただけでそれほどの損傷を生むと思うか？

君は力を恐れた政府に、去勢されたんだよ。だがね、それは不可逆なものじゃないんだ。

ノースウインド こんな社会で、君を生かしていたからには意味があるんだ」

ノースウインド 北風は、怪しげに笑う。

僕はこの薄暗い部屋で、鈍く白い錠剤と、その笑みしか見ることが出来なかった。

交渉

僕は錠剤というものを、凶鑑では見た事があっても実物で見る事は、今の今まで無かった。

昔は一般的な薬の形態で、つい百年ほど前あたりまでは普通に使っていたようだけでも、

経口の薬は危険だという事で、全面的に禁止になったのだ。

今の世からは考えられない事だけでも、

そういつた薬の服用は、個人が自由でしていたらしい。

今はナノマシンの性能もあってか、医者しか薬物の投与は認められていない。

「はじめて見るかい？ 我々にとってはそう珍しいものではないのだがな」

「僕らには要らないもんだ。僕は飲まないぞ」

「飲んでもらわないと困るんだがな」

「存分に困れよ。確かに僕は白虎ホワイトタイガーが殺したいほど憎いが、

それ意外は殺したいとは思わない」

「それは知っている。だけど殺せよ。簡単だろ？」

こいつさえ飲めば、君は前と同じ力が出せるんだ」

そんなバカな話があるか、と一蹴したいところだが、

僕の記憶は曖昧だ。

もしかしたら、本当に……そう思えば思うほど、

目の前の白い塊に、その力があるという気になってくる。

僕の意識を操作しているなんて言う事も、いままでの政府との付き合いを考えれば、説得力がある。

ただ、それを解放する事が出来る錠剤を開発している事だけは、疑問があった。

とにかく行政機関の連中というのはテクノロジーに対して無知だ。まだ司法機関の人間はそういった事にとても敏感なのだが、自前で

開発するような研究室は持たない。

そして、こういった後ろ暗いことを研究する機関というのは、軒並み政府の手によって取り締まられている。

武器を作って身を守るといふより、武器を使って殺されることを恐れる連中の事だ。

当然の結果だとも言える。

「君は……力を取り戻したくないのか？」

「もう沢山だよ」

「怖いのか？」

「ああ」

僕はその質問には即答する。

かならず飛んで来る言葉だと思っていたからだ。

ほとんど世捨て人のようになった僕にとって、怖い事など一握りだが、一握りでも存在はする。

そのうちの一つが、自分の力がもし戻ったら、というものだ。

もう一方では、期待もある。

あの万能感は味わった人間にしか分からないだろう。

どんな武器よりも、どんな防具よりも常に最高の性能を発揮する能力だ。

攻撃的なことだけでは無い。

物質の変成も含んだ僕的能力は、石ころを金塊に変える事だって出来る。

僕のイマジネーションの限界まで、僕の力はひたすらに伸びて行く。

あまりに何も出来過ぎて、怖い。

僕はそれほど頭がいい方ではない。

だから、物事の因果関係を一切考えずに力行使できない。

それこそ、僕の力は一瞬でも気を抜くと、この火星に広がる全基地だって崩壊させかねないのだ。

たとえば金塊を石ころから作った場合、金を付くのに必要な材料を、

他の場所から引っこ抜く。

当然引っこ抜かれた方も変成し、場合によっては空気と反応してしまふ事だつてある。

「君は知らないんだ。僕の能力を映像で見ただけなんだろう？」

「もちろんだ。私を何歳だと思つている？」

「まあ、見た事のある現役は軒並み三十五は超えてるだろうね」

僕が一番最後に能力を大解放したのは、四年前のあの事件の時だ。

しかし、僕の能力が有名になったのはそれ以前の事で、実に五年にも渡る期間、僕はあの強大な力を行使し続けた。

「無駄な話はいい。飲みたまえ。そして殺せ」

「断ると言つたら？」

「君からあらゆる生きている意味を奪う」

「僕にはもう、そんなものは無い」

ホワイトタイガー
「白虎を殺す」

「僕にしか出来ないと言つたじゃないか。殺せるものか。君らに殺されるほど奴は愚鈍じゃない」

「そうでもないさ。君が殺さないなら私たちが殺すまでだ」

僕ははつきり言つて、司法機関の戦力を舐めている。

かつての地球の軍隊のように、彼らは戦闘において機能的に動けるとは言いがたい。

ほとんど「蛇」のような機械に頼っている上に、何より飛び道具が拳銃しかない。

僕たちに致命傷を負わせるような、ライフル弾を吐き出す銃を少数しか配備していないのだ。

警察は十万の暴徒を抑え込めるような機能はもはや無く、ただ恐怖と無気力教育によって集団を束ねているにすぎない。

牙を持つ百五十の虎たちを、とてもじゃないが殺せるとは思えない。彼らが本気で戦うのであれば、地球の武器を使つたらう。

地球の武器は残忍で強力だ。

僕たちよりも殺す事に長け、その事を職業にしている人間でさえ居るのが地球という星だった。

「全滅するぞ。今度こそ」

「どのみち……」

ノースウインド
北風が、僕にはじめて疲れたような表情を見せる。

「私たちは壊滅するだろう。百五十も虎を放っておけばな」

「……条件をつける」

「何だ？」

「僕は殺したく無い相手は殺さない。それでいいなら引き受ける」

「殺さなくてどうするつもりだ？ 捕まえたところで虎を入れる檻なんてないぞ」

「牙を抜く」

「牙？ 彼らの思考こそ牙だろう？ 薬でも使うのか？」

僕は錠剤の近くを、指でとんとんと叩いた。

「物理的ハッキングだよ。思考を改ざんする」

「そんな事が出来るのか？」

「やった事がある。何回か……」

それは、ある意味殺すよりも残酷な事なのかもしれない。

ただ、僕にはどうしてもひっかかる事があるのだ。

リライに関する事だ。

承諾

僕が出した条件を、北風ノースウインドは否定しなかった。ただ、それでどうするのだと聞いただけだ。

現在の司法機関は「殺し」以上に有効な手だてはないのだという。僕のように「無力化」は出来ないのだと。

出来たとしても、僕は一人だが向こうは百五十を超える軍勢なのだ。そのうち十人ぐらいが協力しただけで、火星にあるどの基地でも一つぐらい手中に収めるのは訳が無いだろう。

協力するなら、だ。

僕には、どうも百五十人全員がただ白虎ホワイトタイガーと同じ遺伝子を持っているだけで、

危険な思想まで一緒に持ち合わせているとは思えなかった。

「百五十人全員の意思は確認したのか？」

「位置は確認しているが、面会などしているわけがないだろう。テロリストに、あなたはテロリストですか？ とでも聞くかね……？」

向こうも位置情報だけではなかなか捕まえさせてくれないよ。白ホウ百合イトリライはたまたま引つ張れたが、彼女も政府なんて大胆な場所に食い込んでたんだ。彼女は身元を詐称していた。大雑把としか言いようのない偽装だったが、君と面会するぐらいの権限は持ってたんだ」

「そいつは恐ろしい相手だな」

ようやく、彼女がなぜ連れて行かれたのかが分かった。

確かに、リライならそれぐらいの事をやってのけそうだ。

偽装には確かに頭もいるが、それ以上に度胸と行動力が要る。

「それが百五十人も居るんだ。考えてみたまえ。基地の各機能担当官の一人でも成り済まされたら……：空気の生成でさえ、彼らに握られかねないんだ」

「南五号基地南五号は大丈夫なのか？」

「今は我々司法機関が抑えている。平和ボケしたじいさんたちを説

得するのは骨が折れたがな……」

ノースウインド

薄暗さに目が慣れて来た僕は、北風の顔を見つめた。

いつもなら、そうする事で飛んでくるような冗談も、今はない。話しているうちに疲れたのだろう。

彼女も誰かを殺せだの、抑えるだの、そういう事をしたくて今の仕事をしているわけではないだろう。

おそらく、彼女の家族も「蛇」に殺されたのだ。

司法機関はどんな名前を取ったとしても、「平和ボケしたじいさんたち」の盾にならなくてはならない。

「蛇」というものは民衆に恐怖を植え付ける機械である上に、その標的となつた家族を人質に取るという効果もある。

「蛇」が追跡するのはDNA情報で、同じ機械が生きている限り、永続的に家族を追いまわし、果ては標的の家族全員を殺すまで止まることは無い。

止めるのは、各「蛇」を持った担当官のみだ。

彼は彼女に言ったのだろう。

「家族を救いたくば、我々の仲間になれ」と。

司法機関の人材不足は、僕が暴れてからより深刻化し、そういった残酷な物語をあちらこちらで生んだ。

ノースウインド

北風は、こつやつて落ち着いて話してはいるが、僕の事を恨んでもおかしくは無い。

そういう風に教育されているはずだ。

だが、彼女は違った。

彼女は、「蛇」のようなものを活用する政府を憎んではいるが、僕は恨んではないようなのだ。

僕を恨む奴というのは、用件だけしか話さない。

それこそ雀スハロのように、すぐにでも立ち去るだろう。

「条件はいいのか？ 僕が出した条件で」

「……本来、私には条件を曲げる権限などないのだが。ああ、言っておこう。後はどうにかする」

「よし、錠剤を貸せ」

北風は、錠剤と、それを飲むための水が入ったコップを僕側のテーブルに置いた。

本当に、これを飲めばすぐにでも僕の力が解放されるのだろうか？
もし、解放されたならば。

すぐにもやらなければいけないことがある。

それは、リリーの保護だ。

もし、白虎の子供たちに、北風が危惧するような連帯感があるのであれば、法廷にかけるというのは非常に危険だ。

リンチのような処分をするのであれば、さらに危険だろう。

きっと僕がたどった同じ道を、彼らも歩む事になってしまう。

この基地でもう一度あのような事件が起こってしまったえば、もはやここは基地としての能力を失ってしまうだろう。

幹部の二、三人でも死ねば、基地の機能はたちどころに死んで三日後には汚染が基地内に充満する。

人類は、この火星を地球化するほどの技術を持ち合わせてはいない。ただ、安全な格納容器に幻覚付きで放り込むだけしか出来ないのだ。

「名前は？」

僕は質問を投げかける

「どういう事だ？」

質問の意味が分からない、と言った風に、北風は言った。

「薬の名前だよ。あるんだろ。愛称みたいなのが」

「そんなものは無い。ただ、白い錠剤、としか」

「そいつで充分だ」

僕は、錠剤を手に取り、それを水で一気にとの奥へと流し込んだ。冷たい水が喉を通り、食道を抜け、胃の腑へと落ちて行くのが感じられる。

ただそれだけの現象が、僕にはとても長く感じられた。

薬の効果が、もうすでに始まっているのだ。

覚醒

「どうだ？ 何か変わりはあるか？」

ノースウインド
北風が緊張した面持ちで、僕の様子を訪ねた。

「さあ、まだ分からん」

感覚的な話だが、胃まで到達したのは水だけのようだった。
喉や食堂が焼けるように熱い。

まるでウイスキーでも飲んだ時のようだ。

ウイスキーと違う所といえば、その熱さや痛みが、引いていくのではなく増大していく。

もしや毒薬でも飲まされたのか、とも思ったが、今頃僕を殺そうとする奴など居ない。

昔と違って、僕には力による保護など無いのだから。

「喉が焼ける。水をもっとくれないか」

「わかった」

ノースウインド
北風は近くの黒服に、追加の水を用意するように伝えた。

昔ながらの方式で、わざわざ水を汲んで持って来る給仕は、僕たちの事を一瞥もしない。

ここはあらゆる特権階級が集まるレストランド。

詮索するような目を向ける給仕を雇えるはずもない。

「水を飲んでも治まらないな」

「まさか、毒なのか？」

「君がうるたえるな。僕まで不安になるだろ」

増大する痛みと熱さは、僕に耳鳴りを呼んだ。

もし、彼らが言っているようにナノマシンを直接注入するような薬なのだとしたら、当然の結果のようにも思える。

おそらく、薬とはいいながらも被検体もろくにいなかった事だろう。

「う、ああ」

思わず声が漏れてしまう。

頭痛、めまい、耳鳴り、熱さ、喉の痛み、ついには関節まで、僕は激痛とも呼べるような痛みの嵐に、のたうち回りそうになる。僕にも少しくらいの見栄があるのか、そういう真似はしなかった。それに、あまり他の客に怪しまれても困る。

何も声をあげない限り、この客はお互いに干渉しようとするしない。なんとか歯を食いしばり、痛みを耐える僕を北風が心配そうノースウインドな目つきで見ている。

まさか、ここまでの激変があるとは思ってもいなかったのだろう。

「なかなか……可愛い顔もできるじゃないか……」

いつもの僕ならここで冗談を言うような余裕など無かっただろう。

普通、激しい痛みに襲われているときは思考がかき乱れるものだ。

しかし、今は違う。

逆に思考はいつも以上に整然とし、この痛みが解放に向かっていくものだと知覚している。

大丈夫だ、おちつけと僕は心臓に言ってきたせよとした。

声が出ない。

ノースウインド北風が何かを言っているように見えるが、耳鳴りでその音も聞こえなかった。

ノースウインドその北風の口元を見た瞬間に。

すべての間隔が途切れ、真っ白な世界の中、僕は沈むように寝転んだ。

「大丈夫か？」

「ん？ ああ……何だここは、明るいな」

僕の目に人工の光が突き刺さる。

今まで暗い場所に居たせい、よけいにこたえた。

「君の部屋だ。担ぎ出してもらった……すぐに心拍を見てもらったから、生きてることは分かっていたが。ひやひやしたぞ」

ノースウインド微笑を浮かべる北風は、僕を見下げる形でベッドのそばに座っていた。

そつだ、僕は今自宅のベッドの上にいる。

ここ最近ずつと見ていた天井が、やけに懐かしく感じた。色々有りすぎたからだろう。

異様に長く濃い時間を今日は一日中過ごしていた。

そついえば、今はあれから何時間ぐらい経過したのだろう？

「今は何時だ？」

「日付から聞いたほうがいいぞ。火星時間で三日経ってる……」

「三日だつて？」

いつか見た映画のようだった。

まさか、自分が気絶したままそんな時間を過ごすとは。

「体の調子はどうだ？」

「三日寝てた割りには調子がいい」

僕の筋肉は、まるでたつぷり睡眠を取ったあのように生き生きとしていた。

関節もきしみはしない。

まず、横に北風ノースウインドが居なければあのレストランの出来事は夢の事だつ

たと片付けていた事だろう。

「……その、なんだ。力は……戻ったのか？」

覚悟を決める。

北風ノースウインドが見せた表情は、そういう種類のものだった。

「へ……ああ、試してみよう」

僕は壁に吊つた電子式のカレンダーを注視するために、視力を振り絞つた。

なんと言う事だ。

眠る前より見えない。

「裸眼と一緒だ。なんてこつた」

「なんだつて？ 力を完全に失つたのか？」

「わからん……僕は今まで力を使うことをそう意識したことは無かつたからな。普通の人間が目を細めて遠くを見ようとすると、ぼくは目の前の空気を操ってレンズを作る。その操作が出来てない

ようだ」

「イメージしたらどうだ？ その、レンズを作るイメージだ」

「ああ……やってみよう、うわっ！」

目の前に力を集めるイメージをした途端、目の前……何の比喻でも無く、本当に眼前に紫電が走った。

あたり一体に焦げ臭い臭いが立ちこめる。

僕のまつげが焼けた臭いだろう。

幸い、痛みは無かった。

「力が使えないわけではないようだな」

ほう、と北風はため息をつく。

そんな安心されるほど、僕は事態が前進したとは思えない。

力の制御がうまくいったとして、以前より力が増すという保証は無い。

さっきの電流だって、空中放電とはいえ以前の僕の全力を持ってすれば落雷程度は雑作もなく行えたのだ。

ただ、僕はそれらを「使って」使ったことは無い。

これからはそういった隙が出来てしまう事になる。

痛みや恐怖で頭が混乱すれば、力を使うことさえままならないだろう……あるいは、暴走してしまうかもしれない。

こんな状態で僕はリリーの救出に向かう事が出来るだろうか？

その後「白虎たち」を百五十人も相手に出来るのだろうか？

僕の疑問は、意外とあっさり解決する事になる。

制御

目の前でコンクリートの結晶ショーが開催された。きつと、僕の部屋の建材の一部なのだろう。

視線を動かそうと思っても、この慣れない眼球を運動させるのは一苦労だ。

結論から言うと、僕は薬を飲む前より力の出力を上げる事に成功していた。

ただし、制御はできない。

以前の完璧だった頃の僕は、コンクリートの結晶どころか地球の雲だって火星から視認できた。

基地の外壁側、ドーム状に展開されるスクリーンを変質させて、この基地にいる全員に地球を見せることだって出来ただろう。

しかし、今はそんな芸が細かいことが出来るはずもない。

おそらく、僕の意識が曖昧だからこんな結果になったのだろう。もっと具体的にイメージをしなければならぬ。

「おい、今どこにいる？」

「見えないのか？ 君の横に居るが」

「すまん、力が制御できてない。さっき視界拡張を使おうとして、今更発動した。コンクリートの結晶が見える」

「なんだって？ 本当か？」

喜びの声だろう。

ノースウインド
北風の明るい声が、僕の耳に届く。

混乱してはいけない。

イメージをするんだ。

僕は自分に言い聞かせる。

目を閉じ、開ければ元に戻っている。

僕がそう念じてまばたきをすれば、まさしくイメージ通りに戻っていた。

もし、僕がこの力を使ったまま昏倒して、以前の世界の記憶を失っていたら、一生何かの結晶を見つめつつ暮らさないといけなかったかもしれない。

「畜生、思った以上に厄介な事になったぞ」

「制御できない……予想外だった」

「いや、さつきは制御出来ないと言ったが、訓練次第かもしれない。ともかく、以前のように完全に自由に力を使う事は出来ない」

「訓練？」

「ああ、どうやら僕が厳密にイメージしないと力が正確に使えないようだ。簡単な事なら出来るのかな？」

僕は、疑問に思った事を即実行する事にする。

僕の家は自分の力が何かのはずみでどうにかならないように、あのレストランと同じような構造にしている。

つまり、出力の弱い僕の力では、壁をえぐる事さえ出来ないはずなのだ。

僕は頭の中に次の事を描いた。

イメージ上の僕の腕が、空中に浮いている。

それは僕の本来の筋力より、何百倍も強い腕だ。

それが壁面に指を突き刺し、まるで砂糖菓子でも砕くように壁の一部を握りつぶす。

さあ、やってみたまえ。

そう心の中で命じた途端に、僕の目の前にある壁の一部が、ぼろぼろと崩れ落ちた。

僕のイメージと全く同期したそれは、僕に喜びと不安を同時に与える事になる。

「よし、成功した。でも、厄介だな」

僕の率直な感想は、おそらく北風ノースウインドにも伝わった。

少なくとも能力が発現するまでに数秒かかってしまったのだ。

出力は確かに以前より上がっているが、僕がもし争いごとをするの

なら、

三秒間止まっている相手に何もしない状況は考えられない。
奇襲や狙撃であれば別だ。

逆に奇襲や狙撃をされれば対処できない。

以前は狙撃されようが奇襲されようが、僕の体には薄い膜のように
強固な壁が存在していた。

そういった使い方は、すべて白虎が考案したものだ。

実質、僕の力を使っていたのは白虎だと言ってもいい。

世界をぶっ壊すような事はさせなかったが、そのための布石はさん
ざんやった。

一番最後が、火星の全基地で最も強固な警察機能をもった、この基
地の警察機構の弱体化だ。

きつと、白虎は僕の力について確信を持ったことだろう。

制御可能で強力な力だと。

昔の司法機関は、いくら白虎が二百人集まろうと破壊できそうにも
無いものだった。

なんせ、火星に配置された他の全基地の軍事力を統合したものより、
ここの警察力のほうが強力だったのだ。

平和で争いの無い火星というものは、この基地にいたずらに力を蓄
えさせた。

近隣の基地はほぼ隷下に置かれていたと思っ
ていい。

解放された基地の間では、白虎は英雄扱いだ。

だから、三つも離れた基地で安穩とした暮らしが出来るのだろう。

僕は、深く暗く暴力的な思考に陥りそうなのを、なんとか止めた。

今の僕がそんな状態になったら、周囲で一体どんな事が起こるか分
かったものではない。

「厄介だが、時間がない。僕にリリーの尋問をする権利はあるか？」

「さあな、分らん。政府の連中の白虎恐怖症は相当なものだから
な。君の言うリリーが身分を詐称して政府に入り込んでいたのが発

覚したときなんか、なかなか見物だったぞ」

サディスティツクな笑みを浮かべた北風は、ノースウインド政府の連中相手によほど嫌な思いをしてきたのだろう。

彼女ら司法機関は政府の人間の盾にならなければならない。

僕が殺しまくった奴らも、人間として最低な奴らだったとしても元からそうだったわけではないのだ。

……僕は、昔そついう世間に嫌気がさして、ホワイトタイガー白虎が起こそつとしていた「革命」の波に乗ろうとした。

ただ、どんな感じのいい言葉で包まれていたとしても、ホワイトタイガー白虎が振り回したのは、結局のところ僕を使った「暴力」だった。

革命なんて言葉では騙されない。

騙したく無い。

実際に手を振り回したのは僕だ。

神のように振る舞い、いい気になったのは僕だ。

今度こそ決着をつけなければならない。

ビル

僕は早速、北風と共に司法機関ビルへと向かった。

イメージが必要とはいえ、イメージさえあればかつてと同じく空中歩行が可能となった僕にとって、

数キロの道のりは無いに等しかった。

僕に捕まった北風は、ノースウインド落ち着いた様子で僕の背中に居る。

大体の人は吐き気を催したりするものだが、さすがは訓練を受けた人間という事だろうか。

「いつもこうして動いてたのか？」

「いつもじゃない。早く動く時だけだ。君らが目を光らせてたから、僕らはほとんど地下に居た。地下はあまり捜査が及ばなかったからな……」

「今は地下専門の部署があるけどな。きっと君らのせいだろう」

「違うない」

僕は笑ってみせる。

僕らは人的被害を最小限に、そして経済的には大規模な破壊を起こせるように、

常に気を配っていた。

その場合、移動するのに最も使われていたのは地下だ。

この基地には驚くほどに地下に施設が少ない。

住居の基礎などはあるものの、地下室というのは無い、と言ってもいい。

せいぜい、動力機関などを地下に埋めるぐらいだ。

火星には、地球とは似ても似つかない岩肌がいまだに広がっている。その地肌が見えるのを政府が嫌ったのだらう。

あるいは、何か「開拓者の掟」のようなものが昔あって、それを律儀に守り続けているのかもしれない。

「着いたぞ。何階だ」

「直接入る気か？ 下にエレベーターがあるから、そこら行こう」
「僕は通してくれるのか？」

「私を誰だと思ってるんだ。君は連行されているフリでもしておけばいい」

僕は未だに指名手配中という事になっている。

それは、僕が請け負っていた「仕事」で素性がバレた時に、僕は政府と関係のない存在だと、気の狂ったテロリストだと思われるわけばいけないからだ。

つまりは、いつでも尻尾切りが出来るように、僕はそういった状態に置かれている。

「分かった。お手柔らかに」

「そうか、そうだな。手錠ぐらいはかけさせてもらおうか。今の君には何の意味も無いものだが」

やけに嬉しそうに北風は、僕の手到手錠をかけた。

やはり、こいつは生まれつきのサディストなのだ。

案外、この仕事は天職なのかもしれない。

無論、市民をいびるような悪徳警官だったら、という前提なのだが。

「通せ。北風だ」

正面玄関から北風の後ろについて入って行く。

以前一度入ったときははずいぶん強引に入ったから、こうやって大人しく入るのは新鮮だった。

そんな新鮮さなど、二度と味わいたくないものだが。

「はい、確かに確認いたしました。後ろの男は？」

「連行中の男だ。連絡はいつてなかったか？」

守衛の男は、少し困ったような表情を浮かべて言った。

「すみません、まだ……」

「まあ、さつき捕まえたばかりだからな。そういう事もある」

「ああ……はい、すみません」

「さあ、通してくれ」

「了解しました」

男がそう言つと、見えないゲートが開く音がする。

見えないが、確かにそこには物理的な障壁があつて、開くときや閉じる時には、

わざわざ独特の開閉音を鳴らして危険が無いようにしていた。

これは、僕が一回ぶつ壊したから確かな事だ。

「どうぞ」

守衛はそう言つて、僕たちに奥に行くよう促した。

こうやって透明の障壁を作るといふ事は、別にデザインのためではなく、逃走や侵入を防止するためだ。

普段透明であるから、仮に締まっていなくても締まっているかのように振る舞うし、開いていると思つて直進すれば内部から逃げようとしたものの行く手を阻むという事だ。

昔はもつと攻撃的な門があつたみたいだが、おそらく事故でも起きたのだろう。

政治屋が訪問するのにビビるから文句を言ったのかもしれない。

少なくとも僕が突破した時には、こんな中途半端門にすり替わっていた。

「ここに入るのはあまり好きじゃないんだ」

ノースウインド
北風が、周りに聞こえないよう静かに行つた。

外側から予想できないほどの人数が、一階のロビーに詰めている。

先ほどの透明な障壁は、外からの視線を曲げる効果もある。

完全な遮蔽物があれば中の人間が外をうかがい知る事が出来ないが、

これならば中から外を眺め、かつ強固な壁を得、さらに「攻撃側」

に頭数を見誤らせる事も出来る。

そう、今司法機関ビルは攻撃される事を前提に作られていた。

それはもちろん、「白虎たち」の攻撃を見越しての事だ。

「なぜ好きじゃないんだ？ まあ、僕も好きじゃないが」

「君ときと同じ理由だ。何もしていないのに悪い事をしている気になる」

「今から実際に悪い事をするかもしれないけどな」

「お手柔らかに。せめて私の居場所ぐらいは確保してくれよ」

「ああ、いざとなったら僕が連れ回してやる」

「冗談を言うな」

ノースウインド 北風は、相変わらずの微笑を浮かべて言った。

「このビルの20階に彼女は居る。今は拘留されているだけだ。武装は例の金属塊だけだったからな」

「そうかい。それでも充分だと思っけどな」

「君も知ってるだろ。アレには即効性は無い。鈍器より安心だ」

「あいつで殴れば大抵の人間は死ぬと思っけどな」

「言えてる」

金属塊の大きさは拳より少し小さいぐらいであり、重量となると5kg近い。

充分な鈍器であり、しかも形状としてはやや尖っている。

僕が設計をしたわけだが、この世にある類似の製品はすべて僕が作ったわけではなくて、

僕が現場に落としていったものを再現しているに過ぎない。

「二十階だ。よろしく頼む」

ノースウインド 北風は、僕を拘留するような身振りで、エレベーターを管理する守衛にそう言った。

拘置所

20階は下の階層とはまったく雰囲気の違い、コンクリートの簡素な部屋がいくつも並べてあった。

脱獄など出来ようはずもない。

それに、ここは拘置所であって、刑務所ではない。

ただ狭い空間で軟禁されるというだけであって、ひどい仕打ちや強制労働が待っているわけではないのだ。

ただし、酔っぱらいや喧嘩で捕まった男が入るような場所ではない事は確かだ。

ここに居る連中は、皆揃って「次」待ちの人間たちだ。

法廷、刑務所、あるいは処刑場。

そうだ、刑務所を経ずに直接処刑される人間も居ると聞いた。

「思想犯を隔離する場所というものは、どうも他とは空気が違うな」

「僕に同意を得ようとするなよ。さすがにそんな事は知らん」

「だろうな」

こつり、こつりと僕たちの靴の音が聞こえる。

犯罪者たちが拘留されている場所にしては、異常なぐらいに静かだ。別に騒いではいけないと注意しているそぶりも無い。

ここに入れられた人間は、ほとんどが薬で鎮静されているという話だが、

僕が見る限り皆意識はしつかりしているようだった。

ただし、僕たちの方を見る事は無い。

皆それぞれ、何らかの思索を巡らしているような顔をしている。

まさか、脱獄の計画でも練っているのだろうか。

その心境は、いくらでも脱獄できる僕には分からない事だった。

たとえ少し前のような、弱った力の自分でもこんな獄は抜け出すのは簡単だ。

ただ少し、鉄棒をひん曲げれば外に出られるし、エレベーターのよ

うな原始的な機械をハッキングするのは、僕に取っては息を吸うように簡単な事だ。

無論、ここに居る連中は全員そうだった事は出来ないだろう。

鉄棒をひん曲げる、という事ではなく、エレベーターをハッキングする事だ。

個人の筋力というものは、ナノマシンによる補助で相当なレベルまで引き上げる事が出来る。

災害救助や避難に役立っていたそれは、当然こんな獄を抜けるのにも使えるだろう。

しかし、それを知っていてなおこんな鉄棒で困るのは、何か付加的な効果を考えた結果のものかもしれない。

僕は捕まった事が無いので分からないが、ナノマシンの機能を停止させたり、鉄棒に電流を流す事だって可能だ。機能停止は僕がよくやる手口なので、出来ないはずは無い。

どちらにしろ、ホワイトタイガー白虎の血を引いたものが、どういった事をやらかすのか分かったものではない。

いくら僕を利用したとは言え、この火星最大の暴力装置を一日にして無力化したのだ。

僕だって、無制御に力を使う訳にはいかない。

効果的かつ、関係のない人間に損害を与えない方法など、僕一人で思いつくわけもないのだ。

ホワイトリリー白百合は、それほど頭を持っているのだろうか？

少なくとも、彼女は司法機関を最後まで騙す事は出来なかった。

おそらく僕に会うという行為が不自然すぎたのだろう。ほとんどお互いのことに干渉しない役人たちも、僕の事になるとデリケートだ。

それは、高官からの紹介でなければ僕に会う事が出来ないという事実にも現れている。

「ここが一番奥だ」

「やけに広い拘置所だな」

「60人は入るからな。幸い、一杯になった事は無いようだ。君が白虎たちを全員捕まえたなら、拡張しないといけないかもしれないな」

「あり得ないから安心しろ」

それは、僕の想像する上ではあまり考えられない事だった。

もし、オリジナル白虎のような性向だった場合、僕は迷わずそいつを殺すだろう。

だから……ある意味、今回リリイに再開するのはその確認ということでもある。

「白虎たち」の中には、僕が許容できるような人間も居るのだろうか、という事だ。

ホワイトリリイ
「白百合、面会だ」

薄暗く広い牢の奥に、うずくまる少女が居た。

その言葉を一瞬まともに理解出来なかったのか、少女は一瞬振り返り、すぐに奥へと顔を向ける。

「おい、リリイ、迎えに来たぞ」

「へ？」

間の抜けた返事が聞こえて、リリイは僕の方を見る。

「迎えに来たんだよ。暴れなかったようだな」

「な、何で？ どうやって？」

「僕を誰だと思ってるんだ」

僕は右隣に居る北風を、ノースウインド右手の親指で指した。

「ある事と引き換えに会う事になった……率直に聞きたい事がある」

「何……？」

リリイの目が警戒する目になった。

僕とリリイはほんのわずかな時間一緒に居ただけだ。

協力して逃亡した仲とはいえ、すぐに信頼関係を築けるほど火星人は純粹じゃない。

ホワイトタイガー
「君たち……白虎の子供たちの事だ」

彼女はびくりと体を震わせて、難しそうな顔をする。

「私の、兄弟の事？」

「そうだ」

「居るのは知ってる……でも」

「嘘をつくな。いくら優秀でも、君のような若い人間が高官とまともに話せるものか。奴らは猜疑心の塊だぞ。甲冑を着て話すような奴らが、名も知らない若い奴と会うか」

「……私は、本当に知らないの。ただ、兄弟が居る事と……確かに、私を支援してくれる組織はあったわ」

「その組織の事を話せ。たぶん、それが奴らが作り上げたバックボーンだ」

「うん……」

リリイは年相応の、困り果てたような表情で僕を見て、話をはじめ

「あれは、私が十歳になって、すぐの事だったわ？」

生まれつきの罪人

鍵を開けているというのに、リリイは牢獄の外に出ようとする気配もなく、僕の要求に素直に答えて過去の話を始めた。

「私の十歳の誕生日、今からちょうど六年ほど前の事。私のお母さんが、突然お父さんの事を話し始めたの。もちろん、ホワイトタイガー白虎のこと」
六年前というと、ちょうど僕たちの活動が活発化しはじめた頃だ。僕と白虎は十年ほど前に出会ったのだが、実際に活動を始めるまでホワイトタイガー三年半かけた。

僕の警戒心を解くためと、僕に教育を施すためだ。

当時の僕は、自分の可能性に全く気付いていなかったのだ。

「受像機に映った彼を指差して、あの人があなたのパパなのよ、とママは言ったの。その頃はまだ、ママは元気だったの。でも、それから何日かして、ママは頻繁にあの人の話をするようになった……ママが、失踪するまでね」

リリイは一つ、ため息をついた。

当時の事をあまり思い出したく無いという様子だったが、話をそこでやめることはしない。

「私も十歳の頃だったから、それはもう取り乱した。食べ物も充分にあったし、調理の必要も無かったんだけど、とにかく不安で……不安だったけど、ママは四日ほどして帰って来たの。私は泣きながらどこに行ってたの？ って聞いたわ。そしたら、ママは表情一つ変えずに、パパの所に行った、と行ったのよ。私たちが貧乏人からある程度の収入を得るようになったのはそれからの事。私も、最初は子供心に、パパからお金をもらいに行っただんだと思っただわ。でも、違っただ」

リリイは手のひらを僕と北風ノースウインドの方に向けて行った。

「これを見て」

彼女の親指、人差し指、小指から糸状の光がそれぞれ絡むように伸

び、やがてそれは一枚のスクリーンになった。

爪に仕込む形の受像機だ。

一般的とは言えないものの、民間にも普及しているモデルだった。

「私はある日、嫌な予感がしてママが受け取っていた手紙を見たの」
受像機には、過去の蓄積データストレージから引き出した画像が映し出されている。

そこにひとときわ目立つように書かれた文字には、こう書いてあった。
試験体提供費用明細、と。

「ママはこの手紙を受け取るたびにやつれていったわ。だから、私はこれをずっと残そうと思ったの。いつか、誰かに見てもらうために……結局、怖くて今の今まで秘密にして来た。たぶん、誰かに相談してたらまた違う人生を歩めたのかもね」

そう言つてリリイは、これ以上無いくらいに苦笑う。

ここの真実……この星が火星である事を知った人間が見せる笑いは、いつもそついった種類のものだった。

僕が彼女にはじめてこの世界の本当の姿を見たとき、彼女は腰を抜かしそうなくらいに驚いていた。

それは、知識として知っていた物を実際に見せられた時というよりは、嘘だと信じていたその知識を、ものすごく分かりやすい形で否定された時の顔だと僕は思った。

僕たちの受ける教育は、「火星は過酷な場所で、人々は厳しい労働に従事している」という事だ。

つまり、火星人を他人事かのように見つめるための教育を受けるのだ。

僕は幸いというべきか、不幸というべきか、まともな教育を受けてこなかった。

それこそ、この世に通じる道は白虎ホワイトタイガーが開けたと言つてもいい。

一般人からすれば、それはとてもいい事だろう。美談だろう。

彼が開いた道が、テロリストへの道だったとしても？

「とにかく、とても分かりやすい話だったわ。ママは太陽系一の天才児の実験体でしかなくて、何か、とても体に負担がかかることを

何度も経験した。貧乏人は生きてるだけで罪なのかもね」

「確かに。僕も貧乏人だった。両親共いた記憶がない」

「七月。コリウス君の身の上の事は安易に人に話すものではないよ」

「そういう北風ノースウインドはどうなんだ？」

「私の事もだ。知っていても話さないように」

僕は北風ノースウインドの経歴を知っている。

彼女も相当な貧乏人で、つまるところ、この火星に住まう人々のほとんどの生まれつきの罪人である貧乏人だった。

富は一部に集中し、それを分散するような機構も気遣いもあるはずがない。

ここは火星なのだ。閉ざされた空間なのだ。

誰が一度得た優位を手放すだろうか。粒子をコントロールする企業たちも、それぞれの利権にしがみついている、働ける人数は常に決まっているのに、人間だけが増え続けた。

「君のママは幸せそうだったか？ 仕事ができる」

ほとんど挑発のような言葉だった。僕は自覚しながらも、それをつたのだ。

「うん、きっと、私の事が好きだったから。でもね、私は不幸せだった」

「そりゃあゼイタクになったものだな」

「そうね。ママが不健康になって、最後には寝たきりになったのもそう。でも、本当の不幸はその後だったわ。まだ話してない。一番大事な事を話してないよ」

一番大事な話。

それは、彼女が触れたという「組織」の事だ。

「ママが寝たきりになったのは二年前。私が十四の時よ」

そう言って、リリイは僕たちにまた映像を見せる。

それはライオンの頭と山羊の胴体、蛇のしっぽを持つという伝説上の獣、キマイラを象った紋章だった。

キマイラ

遺伝子研究会。

それが、この禍々しいキマイラの紋章を使用する組織の名前だ。

その一見まともそうな名前は、実際に奴らがやった事を考えると狂気にしか見えない。

それもこれも、この紋章を掲げるようになってからだ。

だいぶ前に地球から来た研究者集団で、名前の通りの事をやっていった。

彼らの火星での主な仕事は、地球の植物が火星でも芽生えさせる事ができるのか、という火星の地球化テラフォーミングについての研究だった。

そのほとんどの研究は地球で終了しており、最終段階として火星に来たわけだ。

もちろん、彼らは盛大に歓迎された。

植物がはびこれば、基地のような狭い場所に閉じこめるのではなく、まさに地球のような環境が実現できるわけだ。

重力の問題こそあったものの、基地に使われている重力発生装置を元にしたものを、大規模に導入する予定もあった。

それらの計画はすべて予定のまま凍結された。

実験用基地の周囲十キロほどに生命体を繁殖させた後、彼らは代替わりをしてしまった。

その基地で起こった事については、想像力豊かな連中が作り出した映像作品や小説で、火星の誰もが知っている事だ。

「君はなかなか勇気があるな。こんな所でこれを見せるなんて」
北風ノースウインドが皮肉を込めた声で言った。

彼らの印を見せるのはもちろん、画像データを所持しているだけで捕まrikaねない。

これは、そういったものなのだ。

「今はもう捕まってるから。それより、この紋章は当然当時の私も知っていたわ。仮にも学校には行っていたわけだから」

「僕は学校に行つてないけど知ってる。白虎ホワイトタイガーが着ていた白いスーツの裏地に縫い付けてたからな」

僕がああ紋章を見て反応したのは、犯罪結社の紋章をこんな場所で見せられたからではない。

この紋章が、白虎ホワイトタイガーとつながりの深いものだを知っていたからだ。

「彼を増やしたのは、奴らの残党か？」

「違うわ」

「残党などいるものか。奴らは全員処刑されたんだ」

法に携わっている人間は必ずそう言うだろう。

北風ノースウインドのような少々道を外れた警官でも言うぐらいだ。

それは誇りでもあり、教訓でもある。

この基地の司法機関は彼らを完全に取り締まっではいけない。

僕が飲んだあの薬も、おそらくは奴らが作ったものだろう……

「残党は確かに居る。でも、あの人たちじゃない……もつと最悪よ」

「奴らより最悪な人間が居るのか？ 罪も無い人たちを拉致し、植

物の細胞を人間に埋め込む実験を繰り返してた奴らだぞ？」

僕も大量の殺人を犯した。人の事を言えた義理などない。

ただ、僕の妻と子をおもちゃのように扱ったクズどもの命を奪った

事は、今でも後悔はしていない。

「白虎ホワイトタイガーは？ 最悪じゃないの？」

奴は惑星を丸ごと支配下に置こうとした。

彼は言った。僕に世界をぶっ壊してほしいと。

でも、そんなのは嘘っぱちだ。

脅しの道具に以上の意味を、奴は僕に持たせなかった。

……果たして本当にそうか？

僕は、結果として司法機関の能力を大幅に削ぎ落とした。

それこそ、たつた150人の人間におびえるぐらいに。

しかし、今の状態が白虎ホワイトタイガーの望んだ結果とは思えない。

奴は一体どこへ消えたというのだろうか？

150人を率いて火星を手中に収める準備を進めている？

それにしても長すぎると思った。

かれこれあれから五年も経過しているのだ。

太陽系一の天才と呼ばれた男の手際は、どうしても思えない。

「残虐な行いだけが凶悪犯の特徴じゃないわ。私の……遺伝子上の父親は、本当に世界をぶっ壊そうと思っっているのよ」

「……火星をか？」

「違う。人間の文明全部を。もう少し、話を続けてもいい？」

僕と北風は、黙って頷いた。

「とにかく、私のママがお金をもらっていたのは、遺伝子研究会からよ。私が政府に入るためのバックアップをしたのも、遺伝子研究会。でも、彼らは以前あった、同じ紋章を掲げる組織とは違う。人も違えば理念も違う。遺伝子操作による可能性なんか見てないよ……ホワイトタイガー白虎の遺伝子の可能性だけを妄信してる。私を政府に入れてみようとしたのもそう。他の子たちも、色々な基地の、色々な場所に派遣されてる。お互いの事は知らないけど、それは確かよ」

「なぜ確かだと思える？」

「そつちの人から聞かなかった？」

「聞いた。しかし、君は前からそれを知っていたんだろう？ なぜ

知れたんだ？ 奴らは秘密主義じゃないのか？」

「私は、こういうことをすると悲しくなるんだけど。やっぱり、娘なんだろうね」

彼女はまた僕たちに映像を見せた。

「配置図よ。これが私。他のが皆」

北風は、それを食い入るように見ていた。

「提出してもいいか？ これは重要な情報だ」

「だめよ」「だめだ」

僕とリリイは同時に言う。

北風はやれやれと言った表情で、素直に提出をあきらめたようだ。

「わかったよ。囚人を一人解放する手続きをすればいいんだろ？」
面倒くさそうな表情の北風ノースウインドとは対照的に、僕の頭の中は揺れる虎の
しっぽに夢中になっていた。

脱獄

「ところで、なぜ提出を拒むんだ？ 人員は割けなくとも、物資ぐらいは都合してくれるはずだ。他の基地での協力者もな」

「君は司法機関アンチウィルスが好きなのか嫌いなのか、時々わからなくなるな。

僕やリイが言ったり、実際に証明してるはずだ。奴らは臆病者の行政のやつらに紛れ込むんだぞ？ 火星一警戒心の強い場所に、リイは潜入したんだ。そんな奴らが、来る者を拒まない、慢性的な人員不足の司法機関の奴らが阻止できると思うのか？」

そう言うと、北風ノースウインドは黙ってしまった。すべて事実だ。

さつきリイが見せてくれた配置図をじっくり見たわけではないから分からないが、おそらく司法機関やその関連にも人員を配置しているはずだった。

もし配置しなくとも、動きがいちいち大きい司法機関では、敏感な者にはその予備動作だけですぐに感知されてしまう。

そうして気付いた時には奴ら「白虎たち」は居なくなり、新たな配置図が作られているだろう。

「その配置図は確かなものなのか？」

「三日前のものよ。一ヶ月前とは3人ほど配置が違うだけだから、追うのは簡単」

「追ったのか？」

「もちろん」

たった三人といえども、虎を追尾出来るのはすごい。

彼女は司法機関のように組織立った動きは出来ないのだ。政治家連中に近づいた時のように、組織の力は使えない。

それが、彼女の実力なのだろう。

「じゃあ、ほとんど最新の配置が頭の中に入ってるんだな……」
リイはこくりと頷いた。

僕は、あらためて配置図を観察する。

見ていると、やはり暴力的な、あるいは力を振るっても不自然ではないような立場を得ている人間が多い。

さすがにこの数が集まれば、この基地の鈍感な人間でも感知できるのも頷ける。

ほとんどパワーバランスが崩壊するぐらいの存在だ。

おそらく、彼らは潜り込むまでもなく受け入れられたのだろう。

近隣の基地にとっては、ホワイトタイガー白虎は英雄なのだ。

「動いているのはどいつだ？」

リリイは僕たちに見せている画像を拡大し、一人一人の名前を見せた。

見せられた順番に、

オルシーイングアイ

千里眼

ヨセフ

大工

アダム

男

というふざけた名前をふられている。

「この人たちはみんな、この部署に入ったわ」

ガーディアン国境監視部、と表示されたその文字列を、僕は何度か眺めた事がある。

この基地にはそんなものは存在しないが、周囲の基地には存在する。司法機関と同じような存在だが、その仕事内容はどちらかというと旧式の軍隊寄りだろう。

かつての軍隊のようなものは、コストの都合でほとんど編成されていない。

基地は攻撃に脆弱すぎて、攻撃を一時間でも受けようものならほんどの生命維持に必要なシステムが駄目になってしまう。

そうなつては、攻撃する意味は無い。

その代わりに組織、運用されるのが警察組織だ。

諜報と防諜を主に担当し、ついでに治安維持も出来る。

普通はそういったものを組織するわけだが、すべての基地がそういつたことを出来るわけではない。

主に人数の関係で、専門的な組織が出来ない。

強大な軍隊より強大な警察機構のほうが、はるかに教育や維持にかかるコストが大きいのだ。

「戦争でも仕掛ける気か？」

「さあ……私にはわからないけど……でも、武器の取引が活発になつてるのは確かだったわ。今更武器なんてそんなに価値がないものだから、うちの連中は大喜びで売ったみたいだけど……」

「武器？ 火器類か？」

「そう。火器は警察の管轄外だったかしら？」

「リリーの皮肉に、北風は返事が出来ない。」

「ともかく、こいつらがきな臭い動きをしていると考えたほうがいいだろう。もう攻撃してたりしてな」

「そんなバカなこと。今戦いを初めても、我々の法が有利だ」

「本気で言ってるのか？ なら、なぜ僕を使おうとする？」

「それは……」

ノースウインド
間違いなく、北風は上層部より専守防衛に努めるなら勝利する、という事を聞かされているのだろう。

たしかに、古来より戦ごとは防御側の方が圧倒的に有利だ。

しかし、それはすべての条件が整った上での話だ。

攻撃側は攻撃する場所や時間を選ぶ。

情報はほとんど相手側に落ちていると考えた場合、間違いなくこの基地はあつという間に陥落するだろう。

何より、以前から周囲の不興を買っていたというのは非常にまずい。戦力は、司法機関が試算している150の白虎たちよりはるかに大きいと考えていいだろう。

僕が出来るのは、彼ら指揮官となり得る奴らを叩き潰す事ぐらいだ。もちろん、僕はこの基地を守りたいわけではない。

守るべきものは無くなってしまったのだ。

僕がこの戦いで得るのもはたった一つ。

敵の親玉、ホワイトタイガー白虎の居場所だ。

「さっさと行こう。時間は多分ないぞ」

「わかった……しかし、リリイは私の権限では解放できないぞ……」

「だったら脱獄しよう。なあ、リリイ、ちょっとそこをどいてくれ」「え?」

僕は出来るだけ簡単なイメージをする。向こう側の空の事だ。

僕はただ、その風景を見たい。見るだけ。それだけ。

おおよそ一秒だろうか。

先ほど力を使った時より、速度と精度が上がっている。

僕がイメージを終えたと同時に、リリイの後ろにあった壁が消失した。

高層に流れるすさまじい強さの風が、リリイを一瞬連れ去ろうとした。

僕はすかさず手を伸ばし、ついでに北風も引ノースウインドつ張った。

「掴まれ、飛ぶぞ」

驚きの表情と緊張でこわばった二人を、僕は見えない力で作り物の空に引きずり出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6634v/>

僕の爆弾

2011年10月9日07時24分発行